倫理，政治・経済

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

令和６年度（第４回）共通テストの「倫理，政治・経済」の問題は，大問が７問で構成され，「倫理」分野から４問，「政治・経済」分野から３問が出題された。設問は，「倫理」分野から16問，「政治・経済」分野から16問であり，設問はすべて単独科目からの引用で，配点は50点ずつであった。

ここでは，本年度の問題に対して，「倫理」と「政治・経済」それぞれの科目の問題作成方針に基づいたものになっているかどうかについて評価を実施した。

なお，評価に当たっては，報告書（本試験）14ページに記載の８つの観点により，総合的に検討を行った。

２　内　容・範　囲

第１問　源流思想の中の比喩やたとえについて（源流思想）

二人の高校生の会話を基本設定とし，原典資料を豊富に用いて，源流思想の中の比喩やたとえに着目して多面的・多角的に考察させる大問である。

問１　ソフィストとソクラテスによる言葉に関わる活動に着目した設問である。基礎的な理解を問うており，本科目の受験者にとってはやや易しい。

問２　様々な宗教や思想における言葉の役割についての設問である。「イザヤ」など細かい知識を含み，「信仰告白は，その文言を文字通り信じるという意味で」などわかりにくい表現もある。また，適当なものを全て選ばせる問題形式でもあり，難易度は高い。

問３　『荘子』からの資料と用語を結び付ける設問である。いずれの資料にも「無用」という語があるが，資料１と「無用の用」の対応はわかりやすい。あとは「逍遥遊」と「万物斉同」を区別できればよい構成になっており，難易度としてはやや平易といえる。

問４　資料をもとに，イエスやブッダの教えに関する知識と資料中のたとえの特徴を問う設問である。①の「神の国は，人間にとって『福音』だ」という表現がわかりにくいが，資料の文章が読みやすいため，難易度は標準的といえる。

第２問　「秩序」について（日本思想）

日本思想における「秩序」に関して，高校生の会話，原典資料を通じて，考えを深めさせる大問である。授業後の会話や読書会を通じて，生徒が自ら課題を設定し，解決を試みる学習場面が設定されていた。出題内容は古代，中世，近世，現代とバランスがよく，難易度も適切であった。会話文を踏まえることなく解くことができた点は，出題の工夫を求めたい。

問１　①の藤原惺窩が仏教の出世間的な考え方を批判して還俗したこと，②の熊沢蕃山が山林伐採や新田開発を戒め，治山治水対策に努めたこと，③は林羅山ではなく伊藤仁斎の説明であることを踏まえると，④を選ぶことができる。ただ，新井白石がキリスト教の世界創造説について下した評価は教科書の範囲を超えており，判断が難しかったと思われる。

問２　柳田国男が取り上げた，人の霊魂が死後に山に向かう祖霊信仰についての知識があれば，**ア**は正文とわかる。また，日本神話の世界観では，現世（葦原中国）と高天原が自由に往来可能であったことを踏まえれば，**イ**が誤りであるとわかる。

問３　日蓮についての理解を問う，平易な設問であるが，正誤判断に迷う細かな知識も含まれ

ていた。イの日蓮の四箇格言は他宗批判であり，念仏宗を無間地獄に落ちる教説として誹っているため，誤りであるとわかる。

問４　読書会において，初見の資料に関して高校生が会話する場面が設定されている。資料の内容を注意深く読めば，趣旨を踏まえていなくても簡単に解答できてしまう。日々の学習の到達度を測る意味でも，教科書で学んだ人間的な在り方生き方についての見方・考え方を活用する設問となることが望ましい。

第３問　対話と主体性について（西洋近現代思想）

倫理の授業における哲学対話の実践を切り口に，対話の在り方と主体性について考えさせる大問となっている。西洋近現代思想の思想家の原典資料や重要な用語を適切に配置し，基本的知識や読解力，思考力を問えるように工夫しており，倫理の授業者に対するメッセージも感じられる。

問１　ベーコンの説く「４つのイドラ」についての基本的知識が問われている。各イドラの内容をきちんと理解している必要がある。

問２　キルケゴールについての基本的知識が問われている。実存の３段階や主体的真理について正しく理解していれば解答できる。

問３　ホルクハイマーとアドルノの思想について正誤が問われているが，選択肢**ア**はフランクフルト学派の考え方であることは分かってもそれがホルクハイマーとアドルノの思想なのかどうかまで識別するのは難しかったのではないかと思われる。

問４　パースの原典資料（資料１）を提示して対話について理解を深めさせた上で，資料２を提示して手がかりを与え，哲学対話の目的を考えさせている。しかし，選択肢が平易なため，資料の読み取りができなくても解答できる面がある。

第４問　「行為の是非と意図」（青年期・現代の諸課題）

現代の諸課題について，「行為の是非と意図」という観点から生徒の会話や資料をとおして多面的・多角的に思索を深めさせる大問である。出題範囲はバランスが良く，全体としては標準的な難易度である。

問１　適応と防衛機制に関する標準的な設問である。防衛機制の種類とそれぞれの特徴を理解していれば問題はない。

問２　終末期医療についての説明の正誤を判断する設問である。生命倫理に関する基本的な用語を理解しておけば解答できる。

問３　アンスコムの資料を読み取り，それに関する説明の正誤を判断する設問である。資料，説明とともに高い思考力・読解力が求められる。資料ではデカルト心理学とアンスコムの思想の識別が難しく，上手く読み取れない受験者もいたのではないだろうか。

問４　第４問をまとめる趣旨問題である。標準的な難易度ではあるが，リード文やⅡの資料「二重結果原則」だけでなく，他の設問とも関連付けられており，大問を包括的にまとめる趣旨問題として適切であるように思う。受験者に大問全体をとおして思索を深めさせようという出題者の意図が感じられる良問である。

第５問　「経済の仕組みと日本経済の課題」

「経済の仕組みと日本経済の課題」をテーマにした経済分野の問題であり，場面設定としては，基本的な理論から現代社会の課題までの様々なテーマを提示した，大学の教員による市民講座のプログラムを題材とし，経済に関する基本的な理解を問う問題である。全体としての難易度はやや平易である。

問１　国富について，資産・負債に関する日本の政府統計を基に基本的な知識・理解を問う，

標準的な設問である。

問２　循環型社会について，その形成に向けた方策のモデルを示した図を基に基本的な知識・理解を問う，平易な設問である。

問３　国債について，基本的な知識・理解を問う，やや平易な設問である。

問４　FTA（自由貿易協定）やEPA（経済連携協定）について，基本的な知識・理解を問う，標準的な設問である。

問５　国際社会における日本の経済協力の特徴について，基本的な知識・理解を問う，平易な設問である。

問６　外国人との共生社会の在り方について，基本的な知識・理解を問う，標準的な設問である。

第６問　「平和とは何か」

「平和とは何か」をテーマにした政治分野の問題であり，場面設定としては，大学のオープンキャンパスに参加し，模擬授業「平和とは何か」を受けた生徒たちが，模擬授業後，平和をめざす思想・制度の発展，「武力紛争のない状態」としての平和（「消極的平和」）や「差別や貧困のない状態」としての平和（「積極的平和」）の分野について，さらに関心をもって調べたことを題材としている。全体としての難易度はやや難である。

問１　日本国憲法における天皇に関する規定について，基本的な知識・理解を問う，標準的な設問である。

問２　国連平和維持活動（PKO）について，知識・理解を基に資料を読み取る力を問う，やや難易度の高い設問である。

問３　日本の国会について，基本的な知識・理解を問う，標準的な設問である。

問４　日本における差別の解消に関連する法律について，知識・理解を問う，やや難易度の高い設問である。

問５　人権保障に関する条約について，基本的な知識・理解を問う，標準的な設問である。

問６　「南北問題」や「南南問題」について，基本的な知識・理解を問う，やや難易度の高い設問である。

第７問　「産業構造の変化と日本の経済・社会の課題」

「産業構造の変化と日本の経済・社会の課題」をテーマにした，政治分野と経済分野の融合問題である。場面設定としては，生徒たちが，このテーマについて探究を行い，まとめを発表するというものである。「課題の設定」，「資料の収集」，「整理と分析」とその相互の関連，「まとめと発表」という，探究の概要を示した図を題材としており，生徒の探究の在り方のモデルケースを示している。日本経済が長期にわたって陥っている低成長の状態から脱出するために必要な取組みを，多面的・多角的に考察させる場面設定であり，知識・理解を問う設問が多いが，資料の読み取りをとおして思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問もあり，全体としての難易度は標準である。

問１　知的財産権の保護の必要性について，基本的な知識・理解を基に会話文を読み取る力を問う，標準的な設問である。

問２　企業の生産拠点の海外移転に伴う輸出入の増減と，そのことに起因する貿易収支について，基本的な知識・理解を基に資料を読み取って，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる，やや難易度の高い設問である。

問３　日本におけるベンチャー企業について，基本的な知識・理解を問う，やや平易な設問である。

問４　イノベーションを促進するための各種の法制度や政策について，時事的な要素を含む知識・理解を問う，標準的な設問である。

以上の内容から，設問の内容は適切で，学習指導要領の定める範囲で出題されており，出題内容に大きな偏りはなかったと考える。

３　分　量・程　度

全体の設問数は，大問数７，総設問数32で，本試験の設問数と同じ適切な設問数であった。試験全体の分量や文字数についても，「倫理」と「政治・経済」それぞれの問題作成方針を考慮すると適切なものであったと考える。

「倫理」の問題において，大問，設問によって読み込む資料の分量が多いものもあったが全体としては適切な分量であった。知識を問う標準的な難易度の設問だけでなく，資料の読み取りが難しい設問もあり，全体としての難易度は適切である。

「政治・経済」の問題の難易度については，基本的な知識・理解を問う設問や知識・理解を基に資料を読み取る設問が多く，思考力・判断力・表現力等を発揮して解く設問が少なかったといえる。全体としてやや平易な印象を受ける。ただし，モデルを示した図や時事的な内容と組み合わせて解答させるなどの工夫がなされている設問もみられた。

４　表　現・形　式

各設問の文章表現・用語については，受験者にとって適切であった。

「倫理」の問題においては，各設問の文章表現・用語について特段の問題はなかった。写真や絵画資料はなく，図表の扱いは適切であった。会話文を基点に原典資料の読み取りや読書会，哲学対話など，「倫理」の本質的な学習活動を幅広く登場させた設定といえる。会話文や資料をとおして基本的な知識を様々な切り口で捉え直すことで理解の質を問う工夫がみられ，学習改善に向けた示唆となっている。

「政治・経済」の問題においては，場面設定について，社会の問題に対して生徒が主体的に取り組む場面設定が多かった。現代社会の諸課題について主体的に考察させ，公正な判断力を養い，良識ある公民として必要な資質・能力と態度を育てるという「政治・経済」の科目の目標に照らして適切であったと考えられる。

５　ま　　と　　め（総括的な評価）

「倫理」分野の出題においては，原典資料等の設問の題材も豊富に用意され，受験者の基本的知識だけでなく読解力や思考力を問おうとする意欲がうかがえた。ただ，設問によっては資料の読み取りだけで解答できるものもあった。資料が効果的に活用され，受験者の理解や思考を深める設問もあったので，さらなる資料の精選と活用の工夫を期待したい。授業での探究的な学びをきっかけにして，生徒が図書館を活用したり，哲学対話の会を開催したりする過程を踏まえて設問が構成されている点に，主体的な学びを求めるメッセージが読み取れ，高等学校等における授業改善に資する問題作成であったといえる。

「政治・経済」の問題においては，大問全体の設定を，政治的分野から経済的分野，国内の問題から国際社会の問題に反映させる工夫がみられるとともに，生徒の学びの場面を学校以外の場面に求める設定が多くなっており，そこで学んだことを基に主体的に活動する学習過程を意識した場面設定がなされている。ただし，第７問の「探究の概要」に示されている，「資料の収集」と「整理と分析」の段階が繰り返される学習過程を踏まえて思考力・判断力・表現力等を問う設問や，「まとめ

と発表」の段階に至るまでの課題解決に向けた合意形成のプロセスを問う設問は，今回の出題ではみられない。探究という場面設定を活かし，課題を解決する過程における，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問を期待したい。

今後も現状の問題作成方針に沿った良問の作成を期待したい。